文政二卯年正月十一日

柳営〻御会

賦御何連歌

梅かをし常盤にはへる千代の松　昌逵

春霞にも久のとの山陰　御

佐保姫の霞の衣立初て　玄昱

さしてゆく舟のうらに追風　昌成

浪白く月も見えける岩か根に　昌惇

静かなる窓の燈の影　昌功

村雨のをともいつかはれ初て　昌永

旅人は松の下行さとに　倍盤

露のしたるきもの思ひそめぬる　修之

秋もくれぬ〳〵聞えつく　豊之

初秋ふかきこの露も深くの尾　庵寿

うねかた〳〵まし住楽の里　其衡

枝の露ふるを増めるの花ならん　玄碩

松もみえて続く〳〵　昌寅

月花をまつ見る春の山の端かな　昌以

汲のけ江の松ゆくるも　芳洲

右御一巡